

「幼児の造形活動」と美術教育

———幼児における美術教育の実際と

美術教育者の意識に関する調査・その2———

川 上 哲 夫
田 中 陽 子

目 次

はじめに

1. 研究（調査）のねらい
2. 研究の方法
3. 研究の内容と結果（部分）
4. 研究の結果と考察
5. 結論

おわりに

本調査研究は山梨県立女子短期大学紀要、第19号、同題—その1—に続くものである。その1に於ては、上記目次中、はじめに、1. ねらい、2. 方法、3. 内容と結果、が収録されてある。その意では4. 考察と続くところではあるが、その1にも記述のとうり、3は調査途上にての結果の報告となつてある故、本稿—その2—の4に敢て＜結果＞を重複させた次第である。

尚、2の研究の方法にも修正加筆の箇所がある。従つて本稿は

2. 研究の方法
4. 研究の結果と考察

と続くことを、はじめに御了解頂きたい。さらに、4の内容はⅠ～Ⅵまでであるが、本稿においては紙面の都合上、4、Ⅰ～Ⅳまでが掲載されてある。従つて4、Ⅴ～Ⅵ、5結論、おわりに、は—その3—に収録となることも

重ねて御了解を得たい次第である。

表については、内訳の中の「幼」は幼稚園を、「保」は保育園（所）を指す。また、「以上」は在職経験3年以上の方、「未満」は在職経験3年未満の方の意であり、数字は全てパーセントで表してあることを断わりたい。

2. 研究の方法

調査方法

- 1) 質問紙によるアンケート形式 郵送法
- 2) 調査計画及び対象（幼稚園教諭、保育園保母）
第一次調査 山梨県立女子短期大学
幼児教育科卒業生
（主に現在在職中の者）
第二次調査 幼稚園、保育園在職中の者
（主に東京中心）
- 3) 調査期日
第一次調査 1985年7月より8月
第二次調査 1985年9月より10月
- 4) 回収内容と結果
第一次調査 185部発送 103部回収
回収率 56パーセント
第二次調査 200部発送 79部回収
回収率 40パーセント
調査合計 385部発送 182部回収
回収率 47パーセント

4. 研究の結果と考察

I. 教育(保育)者が美術教育にのぞむにあたって。

I-1 については専門家養生でない、芸術教育を通しての人間形成のための理論としてあるものを基盤とし、その内、回答者各自がどの方向を強く感じたり、意識したりしながら常日頃、指導及び保育をおこなっているかを直感的に答えてもらった。

結果は表(I-1)のとうり、「創造力の育成」というところに約半数近くが答えている。そして他は分散して一様にある。これは、「創造性」という言葉の流行や知明度に起因するやもしれぬが、文部省発行の指導書、造形活動の意義の1に「創造性や美的情操の発達と造形活動」とあり、これらの影響を考えると、このような結果となるのも当然すぎることなのかもしれない。

次いで、1位との差はあるものの「情操陶冶の最良手段」、「個性の伸張」と続いている。

予想外であったのは、「美的、芸術的生活」の項が意外に少なかったことである。後に触れるが、指導計画の内容等からすると明らかに<生活中心のカリキュラム>であり、その意からしても幼児教育における芸術教育の意義として、オ)がもう少し指導(保育)者の中心に位置するものなのではないかと、筆者には予測されたのである。

I-2、「絵画製作」や「造形」の授業の際の印象についてであるが、特に驚いたり、感心したりした感動の内容について回答してもらった。

この項についての回答の特徴は、一人当りの回答数の多いこと、そして経験によってその差が大きいことである。経験3年以上の者の平均2.5、3年未満の者の平均1.9 合計の平均2.2となっている。因に、I-3における一入当り回答数の平均は1.9である。従って、これらの数より推測するに、教師(保育)も、この項の内容について大変興味や関心をもっており、その感動や印象も経験に比例して増大し、バラエティにも豊んでくるという傾向を見ることができる。

また、内容については、「細部を省略したり、感動の強いものは大きくしたりなど表現の豊かなところ」であるウ)が63%と最も多い。このことについては「はじめに」でも触れたが、この大人と違う表現法は、大人の規準と子供のそれとの差の顕著な例のひとつである。つまり、大人の表現とは、自然主義的写実精神に根ざし遠近感や透視図法に準拠したものに對し、子供のそれは、むしろ象徴主義的表現と方法を執り、表象されるものも記憶像に基づくものであるということである。このような

I-1 芸術教育(美術教育)における基本的意義又は目的は次のどれだと思って(感じて)いますか。

(○はひとつ)

項目	内訳			内訳			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 美的教育	16	11	14	10	7	9	12
イ. 情操教育	13	29	21	13	7	10	18
ウ. 創造教育	48	29	39	43	75	59	45
エ. 個性教育	11	19	15	10	7	9	13
オ. 生活芸術	0	2	1	10	4	7	3
カ. その他	10	5	7	7	4	5	7
無 回 答	5	6	6	7	0	3	5

I-2 美術教育の際、幼児の活動の中に驚きや感動をもったことがあると思います。今までの経験で印象に残ったものが次の中にあれば○をつけて下さい。

(○はいくつでも可)

項目	内訳			内訳			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 行為の自然さ	42	37	40	47	39	43	41
イ. 表現に没頭する	21	19	20	40	4	22	21
ウ. 表現の豊かさ	77	58	68	57	50	53	63
エ. 自主的自発的態度	34	21	27	43	11	28	27
オ. 創作意欲	45	19	32	20	25	22	29
カ. 表現の直截さ	29	32	31	23	36	29	30
キ. その他	6	3	5	13	7	10	7
無 回 答	2	2	2	0	0	0	1

I-3 美術教育の場面にて残念に思われたことが次の中にあれば○をつけて下さい。

(○はいくつでも可)

項目	内訳			内訳			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 模倣が多い	48	31	40	40	50	45	41
イ. 表現が萎縮する	45	39	42	37	50	43	42
ウ. 制作に没頭しない	10	18	14	17	25	21	16
エ. 表現が画一的	40	34	37	53	7	31	35
オ. 表現意欲がない	15	11	13	10	7	9	12
カ. 不得手を意識する	27	23	25	20	14	17	23
キ. その他	8	10	9	10	7	9	9
無 回 答	6	3	5	3	7	5	5

差から生じる子供の表現のバラエティは、時として大人を大変驚ろかすのであろう。

次いで「自然さ」「直截さ」と続いているが、「イ）表現に没頭してしまう」は「ア）自然さ」との継がりも深く、ア）とイ）を合計すると62%となる。それ故に、この項では、幼児の象徴主義的精神と表現態度としての自然さを教師（保母）は印象深くとらえていると言える。

I-3. 美術教育の場面にて残念に思われたこと——この設問は、言い変えると美術教育者としての問題や悩みと言える。

回答を見てみると、大よそ次の3点に絞られる。

イ）表現が萎縮してしまう……。 42%

ア）模倣が多い。 41%

エ）表現が画一的である。 35%

いずれも共通に、子供の感性が開放されず、自然に、のびやかに心の表現が出来てない状況を指導者が意識させられた時のようである。

当然のことながら、I-2が美術教育者としての喜びであるならI-3はその者としての失敗や苦悩と言うことができ、前者が子供の表現の中に、のびやかでしなやかな感性の表出をみた時に對し、後者は全くその逆の回答と言うことができる。そしてこの問題はI-4へと反映していく。

しかし、その前にとりわけここで触れなければならないことがある。それは、周知のとうりこの項において、4位に可成の数で

カ）不得手であることを意識してしまった子 23%と次いでいることに着眼したい。

それは、この様に低年齢の時期から「絵を苦手⁽⁹⁾」とする子供が発生してしまうという問題である。美術教育に携わる者の態度や指導方法と無縁であるとも思われないが、推察すれば以下の理由も考えられる。

1・歴史的にみて今日ほど視覚的刺激の多い時代はかつてなかった

2・その意味で発達の早い子は、自分自身の視点をみだし自己評価出来、他との比較を自発的にはじめてしまう

3・このような発達の早い子と遅い子が同一集団の中にあり、一斉指導を受けることが多い。

この問題は、大変大きな意味をもった事柄であり今後のこととしたいが、少なくとも、鑑賞指導等をさらに取り上げ表現の幅を広げたり、深さを感じさせたりすることや、一斉指導に對し個別指導を考える等のことはこの場で捉えておきたい。

I-4、美術教育に臨むに當り常日頃、最も気をつかつ

I-4 美術教育にのびむにあたり常日頃、最も気をつかわれているもののうち特に念頭にあるものひとつを選んで○をつけて下さい。（○はひとつ）

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 自由にのびのびと	42	53	48	50	57	53	49
イ. 感じたものの定着	10	3	6	3	7	5	6
ウ. 課題や教材が適切	10	5	7	13	7	10	8
エ. 美的関心	5	0	2	10	0	5	3
オ. 大人の規準でない	11	26	19	10	14	12	16
カ. 過程の大切さ	21	6	14	10	11	10	13
キ. 教師自身が楽しく	2	5	3	3	0	2	3
ク. その他	0	3	2	0	4	2	2
無 回 答	2	0	1	0	0	0	1

I-5 今日まで美術教育をしていて特に充実感を感じた時はどんな場合ですか。最も強く印象にあるものひとつに○をつけて下さい。（○はひとつ）

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. ねらいどおり表現	2	5	3	0	0	0	2
イ. その子なりの表現	55	50	52	57	68	62	55
ウ. 幼児が楽しく授業	31	35	33	37	25	31	32
エ. 良い作品が出来た	0	0	0	0	0	0	0
オ. 同僚に評価されて	0	0	0	0	0	0	0
カ. 落ちこぼれなく	3	2	2	0	4	2	2
キ. 表現の伝達	8	6	7	7	7	7	7
ク. その他	0	2	1	0	0	0	1
無 回 答	2	0	1	0	0	0	1

ているもの言わば、美術教育者の授業に対する姿勢とか信念と言うことが出来る。表を見ると、

ア）幼児が自由にのびのびと表現できるよう 49%

オ）大人の規準を押しつけたり、判断したり…16%

カ）結果のみならず過程を大切にしよう 13%となりア）が圧倒的に抽んでひとつある。くりかえすが、I-2豊かな表現から享受されるものに感動し、I-3魂の開放された自由でしなやかな感性の表出のない場面を残念に思うに続くものであることが、ここでは明白となっている。そこで次の問において、

I-5、美術教育上の充実感を感じる時においても、回答は集中し、「楽しく授業が出来、その子なりの表現が見られた時」に、このI全体の項を集約することができる。また、このことより幼児中心の授業や保育をめざしていることが良く理解できよう。

ちなみに、この項において「キ）作品を通して幼児と

コミュニケーションの伝達がうまくできた時」は3位に位置し、この時期においてはあまり問題とはならないであろうが、表現伝達あという意識が芽ばえつつあることを記しておきたい。

I-6は美術教育に関する研究及びそのテーマについてであるが、過去を振りかえってのトータルであるとする大変少ない数と言えるのではないかな。

そのテーマの中味を少ないながら大別すると次のような4つのパターンを発見できる。

1. モンテソリーと遊具・フレーベルの恩物などの先達の研究に立脚したもの。
2. 生き生きと表現する・感性を培う活動などイメージを先行させて研究するもの。
3. 絵画の指導や方法について・絵画指導の方法と内容・教材研究など具体的に内容を限定していくもの。

II. 教育（保育）者が美術教育の指導計画（教育過程）をたてることについて。

II-1では、はじめに美術教育についての指導計画をたてるに当り、基本的な考えを概括的に聞いてみた。この項については、設問の方向に一貫性の無かったことを反省しつつも、次の様な傾向を見出すことが出来る。

指導計画の要不用論のある昨今ではあるが、現場にて指導（保育）に携わる方々の考えとしては、目安程度（50%）の計画を一等必要としている。さらに、絶対必要（24%）を加えると74%の方が必要性を感じており、イ）とウ）を加えた不必要は僅か2%と比して圧倒的である。また、「絶対必要」は経験3年未満の者17%、経験3年以上の者30%と、経験者ほど必要性を感じているのも興味のある現象である。

そして、その実行については、柔軟性をもたせる93%となっている。特に幼児教育においては幼児の実態に則した幼児中心の指導に重点を置くことを考えた時、上記の結果は至当なことと言える。

ひっきょう、指導計画については目安程度のものを最大必要とし、実行は柔軟性をもたせるという傾向を表層的ではあるが推測できる。

II-2・所属の園において指導計画をたてているかどうかの設問である。表のとうり、II-1の傾向を反映し、指導計画をたてている園は90%となっている。「その他」では部分的であり、領域によっては計画をたてるというもの少数ではあるがあった。

ところで、ここでは是非説明を要することがある。もとより今回の調査のアンケートの回収を最も左右した原因がこの項の設問にあったということである。それは、ア

I-6 現在又は以前に、あなたあるいはあなたの園において美術教育に関するテーマで研究しておりますものがあればお教え下さい。

項目	内訳			内訳			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
有	16	15	15	10	7	9	13
無	84	85	85	90	93	91	87

4. ことばと絵・造形リトミックなど他領域との関連を考えた研究。

もとよりテーマ数も少なく、資料等もほとんど含まれておらず、詳細な内容については今後の研究調査を待って充実させたい。

II-1 「絵画制作」や「造形」の指導計画について（〇はいくつでも可）

項目	内訳			内訳			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 絶対必要である	34	18	26	23	14	19	24
イ. 振り廻され不必要	5	0	2	0	0	0	2
ウ. 拘束され不必要	0	0	0	0	0	0	0
エ. 目安程度の計画	45	44	44	60	64	62	50
オ. 計画どおり実行	2	0	1	0	0	0	1
カ. 実行は柔軟性を	95	97	96	93	82	88	93
キ. その他	2	0	1	0	4	2	1
無 回 答	0	0	0	0	4	2	1

II-2 あなたの所属する園では、指導計画をたてていますか。（〇はひとつ）

項目	内訳			内訳			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. は い	94	90	92	90	79	84	90
イ. いいえ	2	3	2	7	7	7	4
ウ. わからない	3	3	3	0	11	5	4
エ. その他	2	2	2	7	0	3	2
無 回 答	0	2	1	0	4	2	1

ンケート回収の後日、筆者等はアンケート未定出者数人にその理由を質問した。その結果「私（の所属の園）は指導計画をほとんど立てていない由、提出を渋り断念してしまった」という事情が大部分を占めたのである。従って総回収率47%、未回収率は53%であり、可成の割合で指導計画を立てていない園のあることが予測できよ

う。Ⅱ－２の表イ）指導計画をたてていない４％という結果のみでは表わすことの出来ない問題であり説明を加えたが、このことも正しく客観化する必要があるやに思われる。

Ⅱ－３Ａ・指導計画作成の方法であるが、同年次の教師や保母と共に相談、研究して決定している（４０％）が最も多くなっている。次いで「その他」となっているが内容は合併型で、例えて同年次で考えたものを元に園全体の会議等で決定するなどである。

続いて３位にふたつ

ア）各自が各々自分で考える １３％

エ）園の会議等を通して全体で考える １３％

がある。表からみると、各々自分で考える（２６％）は保育園で、全体で考える（１５％）は幼稚園で各々多く見られることが分かる。既存のものを渡される（２％）も少ないながら存在することも特記しておきたい。

Ⅱ－３Ｂ・指導計画の形式については、１９７８年筆者による指導計画の実態調査に基づいている。その時の結果も、形式は月間、各年次別、領域の区別無しという傾向を最も多く見出すことが出来、今回の調査結果と類似している。以下形式の（１）～（３）までを順に追ってみる。

Ⅱ－３Ｂ形式（１）・どのような単位でどの期間をもって指導計画としているかという設問である。表で多い順に見ていくと、月間（４８％）、年間（４１％）、週間（３１％）となる。しかしこの項においては複数回答がほとんどであり（１７８％）、月間及び週間を単位とし年間を期間として指導計画をたてていると読むことが順当であろう。

Ⅱ－３Ｂ形式（２）・年次別、クラス別等の指導計画の区分については、「各年次別」が６５％と抽んでひとつある。Ⅱ－３Ａ指導計画を立てる方法にて、最も多い回答「同年次の同僚などと共に考える」との関係がここで確かに表れている。

内訳を見ると、幼稚園に於ては「各年次別」に集中し、保育園に於ては「各年次別」と「各クラス別」が半々にある傾向が分る。又、保育園経験３年以上の者についての「各クラス別」は５０％と多く、各個人に任されることの多いことを想像させる。

Ⅱ－３Ｂ形式（３）・絵画、工作、版画等の領域（分野）の区分の有無については、区分なしが６２％と多数を占めている。この項目の調査動機は、前回調査の際の指導計画（教育過程）書の表現形式に基している。というのは、計画書に単元名が総花的に並列されており、授業の流れ

Ⅱ－３ 指導計画の方法や内容・形式について。

Ⅱ－３Ａ 指導計画はどのような方法でたてていますか。
（○はひとつ）

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 各々自分で考える	5	10	7	23	29	26	13
イ. 先輩が指導・助言	8	11	10	13	4	9	9
ウ. 同年次の同僚と	48	37	43	37	32	34	40
エ. 園全体で考える	18	13	15	13	4	9	13
オ. 出来合いを使用	0	5	2	0	0	0	2
カ. そ の 他	21	18	19	10	25	17	19
無 回 答	3	10	6	13	14	14	9

Ⅱ－３Ｂ 指導計画の形式

Ⅱ－３Ｂ 形式（１）

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 年少から年長まで	24	11	18	7	7	7	14
イ. 年 間	39	40	40	40	50	45	41
ウ. 学 期 間	18	8	13	13	21	17	14
エ. 月 間	39	44	41	70	54	62	48
オ. 週 間	27	23	25	47	39	43	31
カ. 日 案	15	16	15	20	14	17	16
キ. そ の 他	3	6	5	0	0	0	3
無 回 答	8	10	9	17	14	16	11

Ⅱ－３Ｂ 形式（２）

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 園全体で一括	16	11	14	13	7	10	13
イ. 各年次別	77	71	74	43	50	47	65
ウ. 各クラス別	10	10	10	50	32	41	20
エ. そ の 他	3	5	4	0	4	2	3
無 回 答	6	10	8	10	14	12	9

Ⅱ－３Ｂ 形式（３） 絵画、工作、版画などの領域別の有無

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 領 域 別	23	26	24	17	25	21	23
イ. 領域の区別無	68	55	61	67	57	62	62
ウ. そ の 他	3	3	3	3	4	3	3
無 回 答	6	16	11	13	14	14	12

や他年次との係わりを把握するのに困惑した所以である。

もとより、計画書は誰に見せるという性格のものでなく指導（保育）者自身の計画であろう。だがしかし、大づかみでも領域別区分が無いと何にも増して指導（保育）者自身が過程や段階を掌握出来ないのではないかという不安が筆者には湧いてくる。ともあれ、この問題は今後の詳細な調査研究の必要を示唆している。

Ⅱ－３Ｃ・指導計画の内容は主にどのようなものを参考、規準にして立てているか３つを選択してもらった。表から多い順に見ていくと以下の様になる。

カ) 年齢、発達段階	81%
エ) 園の行事	40%
ケ) あそび	30%
オ) 季節の催物	28%
ア) 園の教育目標	24%
ス) 教材（技法を含む）	21%

ここで「園の行事」と「季節の催物」の内容は重なる場合が多く、両者を加えると68%となる。従ってこの項の回答は、年齢、発達段階及び行事や催物が中心となって計画されることを教えてくれる。

それらと比較すると、教科（美術）の特徴、教科（美術）の系統性、現代美術等に関しては数の上ではほとんど参考とされていない。教科中心の教育過程から生活中心主義へ、つまり幼児の生活や活動を主体とした考え方が、計画書作成時に反映されてあることを知る。この項目も内容のあることであり今後充実させたい。

Ⅱ－４・「絵画製作」や「造形」の指導計画に関する目的達成の割合は、８割及びそれ以上を含めると53%となり、半分及びそれ以下の34%を上回っている。内訳を見ると幼稚園の方の最多数は８割達成の49%、保育園の最多数は半分達成の40%である。計画のねらいや目的は、幼稚園の教師の方がより達成されていると感じていることが知れる。

Ⅱ－５・次は、指導計画の実行についてであるが、計画が実際のどの程度実行されているかは表のとうりとなっている。この回答も可成り高い率のところを示している。計画の80%以上を実行している者は40%であり、60%～69%まで実行が34%ある。言いかえると計画の６割以上実行している者が74%である。詳細にみるとここでもⅡ－４と同様、保育園より幼稚園の方が実行率も高くなっている。

しかし、見方を変えて考えた場合、実行率のひくい保育園の方がそれだけ柔軟性をもって授業に臨んでいるということにもなるかもしれない。この設問の内容も今後

Ⅱ－３Ｃ 指導計画の内容は主にどのようなことを参考にしているか。（○は３つ）

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 園の教育目標	37	19	28	17	14	16	24
イ. クラスの教育目標	5	3	4	13	14	14	7
ウ. 地域・環境	3	3	3	3	4	3	3
エ. 園の行事	40	42	41	50	25	38	40
オ. 季節の催物	21	35	28	17	39	28	28
カ. 年齢、発達段階	84	81	82	87	71	79	81
キ. 教科の特徴	0	0	0	0	0	0	0
ク. 他の領域との関連	26	21	23	13	4	9	19
ケ. 幼児のあそび	44	18	31	37	18	28	30
コ. 保育園の経験や勘	2	2	2	3	0	2	2
サ. 教科の系統性	3	0	2	0	0	0	1
シ. 現代美術	0	0	0	0	0	0	0
ス. 教材(技法を含む)	16	29	23	13	21	17	21
セ. 用具・教材等	16	11	22	3	4	3	10
ソ. その他	2	0	1	0	4	2	1
無 回 答	3	11	7	13	18	16	10

Ⅱ－４ 指導計画の目的達成率ほどの程度ですか。

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 大体達成	13	5	9	7	4	5	8
イ. 8割位達成	48	50	49	33	36	34	45
ウ. 半分位達成	29	29	29	37	43	40	32
エ. 半分以下の達成	2	2	2	3	0	2	2
オ. その他	5	3	4	13	11	12	7
無 回 答	2	10	7	7	7	7	7

Ⅱ－５ 指導計画の実行率は何パーセントですか。

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 100%	2	0	1	0	4	2	1
イ. 99～80%	44	47	45	30	21	26	39
ウ. 79～60%	31	29	30	40	43	41	34
エ. 59～40%	8	11	10	17	21	19	13
オ. 39%以下	0	0	0	0	0	0	0
カ. その他	11	2	6	7	0	3	5
無 回 答	5	11	8	7	11	9	8

の課題と考える。

II-6 A・計画のねらいや目的を達成する上での妨げとなるものについてであるが、実に理由は様々であることが表より分る。敢えて多い順に6項目ほど上げて見る。

- コ) 教育(保育)者の経験が浅い 36%
- ア) クラスの人数が多い 27%
- イ) 月齢差があり過ぎる 33%
- ソ) 絵を描くのが苦手の幼児がいる⁽⁶⁾ 15%
- ス) 知識に傾りがある(保育者の) 13%
- エ) 行事が多過ぎる 12%

これらを少々まとめて問題化してみると

1. 経験や知識等、教育(保育)者自身の問題。
 2. クラスの人数、月齢差等からは、幼児の集団構成、指導形態の有り方(一斉授業等を含め)、設置規準(行政的意味において)及び経営上などの各問題。
 3. 指導内容及び方法(幼児の実態を含め)の問題。
 4. 園内における行事の数や仕事の量の問題。
- となる。

II-6 B・計画の実行の妨げについては以下の順となる。

- エ) 行事が多過ぎる 35%
- オ) 全体の仕事が多い 20%
- サ) 授業準備が充分出来ない 20%
- ア) クラスの人数が多い 16%
- コ) 教育(保育)者の経験が浅い 15%
- ケ) 材料、道具が充分でない 14%

幼児教育における授業(保育)の場合、指導計画の実行が必ずしも正しいとは限らない場合があると思っているのは筆者ばかりでは無いであろう。しかし、上記の様な理由で妨げとなっているとすれば、II-6 Aの各問題と同様多くの課題を内在している回答結果であるといえる。

大きな問題とあいまって、行事や催物等の精選、仕事の合理化、授業準備時間の確保、教育(保育)者の研修、道具、材料等の拡充等は急務であろうことをこの項は示唆している。

II-7・現行の「絵画製作」や「保育」の指導計画を評価してもらった。イ)の「まあまあである」が57%と一番多くなっているが、ウ)の「不満である」が26%と予想以上に多くなっている。II-4及びII-5の目的達成割合や実行率からみると「不満」が多過ぎるよう思われた。しかし、理由をみるとく学生時代に学んだものをもっと反映させたい>とかくもっと論理的に考えたい>とかく幼児の実態把握をきちんと考えたい>等となっている。従って、この結果については、理想的なものをめざした謙虚な回答故のことと解釈したい。

II-6 A 指導計画の目的達成の障害となっているもの。 (○はいくつでも可)

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. クラスの人数が多い	32	26	29	20	25	22	27
イ. 月齢差がある	19	27	23	23	21	22	23
ウ. 他とのつりあい	13	2	7	7	7	7	7
エ. 行事が多過ぎる	13	11	12	13	11	12	12
オ. 全体に仕事が多い	5	2	3	13	4	9	5
カ. ねらいが高い	11	10	10	10	0	5	9
キ. 教材の要求が高い	2	2	2	3	0	2	2
ク. 教室の環境が悪い	5	2	3	10	14	12	6
ケ. 材料・道具がない	10	5	7	17	4	10	8
コ. 保育者の経験が浅い	16	47	31	40	50	45	36
サ. 授業準備が出来ず	5	6	6	27	11	19	10
シ. 教材費が少ない	3	0	2	0	7	3	2
ス. 知識の傾り	16	10	13	20	4	12	13
セ. 幼児が集中しない	6	5	6	0	14	7	6
ソ. 絵の苦手な幼児	16	13	15	13	21	17	15
タ. その他	16	21	19	10	7	9	15
無 回 答	8	2	5	0	11	5	5

II-6 B 指導計画の実行の障害となっているもの。 (○はいくつでも)

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. クラスの人数が多い	24	15	19	3	14	9	16
イ. 月齢差がある	3	6	5	13	11	12	7
ウ. 他とのつりあい	6	5	6	17	7	12	8
エ. 行事が多過ぎる	37	39	38	37	21	29	35
オ. 全体に仕事が多い	23	15	19	37	11	24	20
カ. ねらいが高い	3	0	2	3	4	3	2
キ. 教材の要求が高い	0	0	0	3	0	2	1
ク. 教室の環境が悪い	6	6	6	7	14	10	8
ケ. 材料・道具がない	13	11	12	30	7	19	14
コ. 保育者の経験が浅い	3	18	10	13	36	24	15
サ. 授業準備が出来ず	18	16	17	23	29	26	20
シ. 教材費が少ない	0	5	2	10	11	10	5
ス. 知識の傾り	5	5	5	13	4	9	6
セ. 幼児が集中しない	5	5	5	3	25	14	8
ソ. 絵の苦手な幼児	5	8	6	7	7	7	7
タ. その他	19	21	20	10	11	10	17
無 回 答	6	2	4	3	4	3	4

II-7 現行の「絵画制作」や「造形」の指導計画を 自己評価するとどのようなものになりますか。

(○はひとつ)

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 満足している	5	6	6	0	4	2	4
イ. まあまあである	61	56	59	53	50	52	57
ウ. 不満である	26	24	25	27	29	28	26
無 回 答	8	13	10	20	18	19	13

Ⅲ、美術教育の指導（保育）の内容

Ⅲ－１・美術教育である「絵画製作」や「造形」の指導（保育）の際、最も拠りどころとなっているものは何であるか、二つ選んでもらった。表をにらみ合わせると、次の５点に代表される。

- イ）社会へ出て先輩等から学んだもの 68%
- ウ）指導書や参考図書から得たもの 48%
- ア）学生時代に学んだり、得たもの 32%
- オ）自分で幼児を観察して得たもの 24%
- エ）研修会、実技講習会等で得たもの 22%

明細に見ていくと、「社会（職場）へ出て先輩や同僚から学んだもの」は、特に幼稚園教師では73%と高く、比して保育園保母では第二位の57%となっている。幼稚園に於いては就業中での研修時間が確保し易いからではなかろうか。

又、保母の一位は「指導書や参考図書より得たもの」（62%）であり、幼稚園教師ではこれが二位で41%となっている。大層、書物から影響を受けていることが知れる。さらに、「学生時代に学んだり得たもの」を拠りどころとしているは、経験３年未満の者53%、経験３年以上の者12%と大きな差が見られる。職場での経験が長くなれば、学生時代に得たものよりは、研修会、実技講習会で得たものや自分の眼で幼児の興味や関心等を観察して得たものに多くを依存することも当然であろう。

とりわけ、この項からは以下の様子を教えられる。

- １、職場での人間関係の重要性
- ２、良き先輩、指導者の養生
- ３、良書の発刊
- ４、教員（保母）養生機関の充実
- ５、研修会、実技講習会等の再教育機関の拡充

Ⅲ－２・美術教育の指導上、困ったり、行き詰まったりした情況の解決手段となるものを聞いてみた。表から多い順に見てみると

- エ）園の主任や先輩 74%
- ウ）園の同僚 69%
- キ）社会（職場）に出ってから購入した本 38%

となり、続いて「研修等で得た資料（29%）」「学生時代のノートや本（26%）」「学生時代の友人（20%）」となっている。蛇足ながら「学生時代の先生（4%）」は一番低い。

包括してみると、解決手段が人間の場合 167%、書物や資料の場合が93%となる。ただし、相談相手の人間も、指導的立場にある人とそうでない人とに分けて考えた場合は次のようになる。

- 園の主任や先輩、学生時代の先生等 78%

Ⅲ－１ 指導の際拠りどころにしているもの （○はふたつ）

項目	内訳			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 学生時に得たもの	8	55	31	20	50	34	32
イ. 職場で学んだもの	65	82	73	63	50	57	68
ウ. 指導書や参考図書	45	37	41	60	64	62	48
エ. 研修会実技講習会	34	10	22	27	18	22	22
オ. 幼児観察を基に	34	16	25	27	14	21	24
カ. 自分の幼児期経験	6	3	5	0	0	0	3
キ. 自分の子の育児	2	0	1	0	0	0	1
ク. 自学独習により	3	0	2	0	0	0	1
ケ. その他	2	2	2	3	0	2	2
無 回 答	2	0	1	0	0	0	1

Ⅲ－２ 指導上、困った状況を解決する場合の手段。 （○はいくつでも可）

項目	内訳			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 学生時代の先生	3	5	4	0	7	3	4
イ. 学生時代の友人	11	27	19	20	21	21	20
ウ. 園の同僚	81	56	69	90	50	71	69
エ. 園の主任や先輩	68	82	75	73	68	71	74
オ. 学生時代に得た資料	21	32	27	17	32	24	26
カ. 研修で得た資料	39	18	28	40	18	29	29
キ. 自分で購入した本	39	35	37	50	32	41	38
ク. その他	8	0	4	7	0	3	4
無 回 答	2	0	1	0	0	0	1

園の同僚、学生時代の友人 89%
 学校、職場、研修会等で得た本や資料 93%
 以上のことから、Ⅲ－１に上げた５つの要請も急務であることの意を筆者は強くするのだが。

ひるがえって、経験３年以上の者の相談相手が同僚の場合は84%、未満の者のそれは54%と差がある。このことから、職場で長く務めるには、職場内に信頼出来る人のいることや人間関係のうまくいっていること等が大切な要因となるように思われる。

Ⅲ－３・美術教育に関する得手不得手の問題であるが、表からすると「普通」が57％と最も多く、次いで「苦手」が25％、「得意」が10％となっている。

書かれた理由（53％）を読むと、「普通」の中味は大変謙虚な答えが多く、「授業それ自体はうまく行なえているが、まだまだ難しい」「試行錯誤を繰り返している」等となっている。経験6年目の者で、「当初大の苦手であったが研修会等に参加を重ね現在では大変楽しく授業を行なっている」克服型や、7年目の者で「マンネリズムに陥ったと反省する」自戒型等も「普通」の中にみられる。前述のこと等を加味すれば「普通」は大よそ得意な方と見るのが順当に思われる。

得意な人々の内容も集約すると、まず指導（保育）者自身が美術的表現を得意とすることがめだつが、必ずしもく絵を描くのが得手な>という場合のみでなくく美術的な楽しみ方を知っている>という場合も多い。それだから授業（保育）に臨んでも、「子どもたちに、いろいろ与えるのが楽しみだ」とか「子どもたちの反応を見て、眼がピカピカ輝いている時などは大きな喜びだ」そして、「授業（保育）は、ほとんど子どもたちと一緒に描いたり、造ったりしている」と感動的な、意欲的な回答が多くなるのだと想像される。

しかし、四人にひとりとは「苦手」であるというは、大きな問題と言わなければなるまい。しかも、その理由は実に様様であり次に主なものを列挙してみる。

- 1・指導（保育）者が美術が苦手であり、すでにコンプレックスをもっている
- 2・導入、助言等を含めた指導の方法がわからない
- 3・経験不足による多くの悩み
- 4・子どもの実態把握が出来ない
- 5・全く描かない子がいる
- 6・園の美術に対する方針と合わない

ところで、経験3年未満の「苦手」は33％であるが経験3年以上になると17％と減少傾向にあり、必然的に、「普通」「得意」は経験を重ねるほど増加傾向となっている。このことは光明を見る思いであるが、経験を重ねることが、苦手意識を克服するひとつの可能性をもった一方法であることも知らされた。

この設問に関しては、他領域との比較等を通して追究、充実させねばならないように思う。

Ⅲ－４・美術教育指導（保育）上、戸惑ったり、蹉いたりの失敗した苦い経験の有無を質問した。まず、この項では、ひとり当りの回答率 2.9と大変多くなっている。回答者の興味の大なることが知れる。表からみると

- | | |
|-------------|-----|
| オ）指導経験の浅さから | 50％ |
| エ）準備不足から | 48％ |

Ⅲ－３ 美術教育の指導は、あなたは得意な方ですか。 (○はひとつ)

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア、得意な方だと思う	13	10	11	10	7	9	10
イ、普通	61	44	52	67	68	67	57
ウ、苦手な方	18	40	29	17	18	17	25
エ、その他	6	5	6	3	4	3	5
無 回 答	2	2	2	3	4	3	2
理由の記述	56	63	60	37	43	40	53

Ⅲ－４ 美術教育の指導上、苦い経験のあるものに○をつけて下さい。 (○はいくつでも可)

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア、授業散漫になった	13	15	14	10	14	12	13
イ、教える意識が強い	21	29	25	40	14	28	26
ウ、導入の失敗から	50	50	50	37	39	38	46
エ、準備不足のため	58	34	46	70	36	53	48
オ、幼児の発想生きず	53	56	55	57	21	40	50
カ、幼児の制作の遅さ	29	34	31	27	14	21	28
キ、大人の規準で助言	23	23	23	17	4	10	19
ク、過程の見すごし	10	0	5	0	0	0	3
ケ、鑑賞指導強い印象	24	23	23	13	29	21	23
コ、似た絵が多過ぎる	21	10	15	10	14	12	14
サ、その他	8	13	10	3	14	9	10
無 回 答	3	0	2	3	7	5	3

ウ）導入の失敗から 46％

以下「幼児の制作上の遅さ（28％）」「教えるという意識が強過ぎて（26％）」「鑑賞指導の際の印象が強過ぎて（23％）」「大人の規準を押しつけて（19％）」と続いている。苦い経験とは、いずれにしろ幼児よりも指導（保育）者自身に問題の多くがあると回答者は、捉えている。

ところで、個別に見ていくと、幼稚園における一位は「準備不足」となっている。又、「準備不足」は、経験3年以上の者62％、未満の者34％となっており、経験者ほど準備不足を感じているのがわかる。さらに、「指導経験不足」も、経験3年以上の者54％に比して未満の者46％とやはり経験者ほど経験不足を上げているのも特記しておく。

Ⅲー５・巡視の際の指導、助言の主な内容について３つ選択してもらった。年次の区分の有ったものは全体の１４％と少なかったので、それらの回答は複数回答扱いとし表を見ていく。

キ) のびのびと自由に表現しているか	85%
カ) 意欲的に取り組んでいるか	60%
オ) いろいろ工夫しているか	45%
サ) 教材や用具、材料の使い方	45%
エ) 課題を理解しているか	38%
ウ) 制作に集中しているか	31%

以下、イ) 色づかい (26%)、シ) 制作の妨げはないか (20%)、ア) かたち (18%)、ケ) 模倣 (12%) と順次ある。これらを集約し、概括的に述べてみる。

１、幼児の制作に対する姿勢や取り組み方を一義的に考えているようである。のびのびと自由な表現、意欲的であるかどうか、制作に集中しているか等はいずれも高い比率のところにあることから推測できる。

２、次に、制作過程時における指導（保育）上の問題、つまり、工夫されていることがあるかどうか、教材としての用具や材料のこと、そして課題の理解度等が位置している。

３、そして、作品そのものに関する色かたちである造形要素に係わる内容がきている。

４、さいごに、模倣や画一的等の作品の内容の問題となっている。

Ⅳ．美術教育の指導（保育）の方法

ここでは、特に、教材や技法の扱いと用具（道具）、材料等について調査研究してみる。

Ⅳー１Ａ・美術教育上の活動を、絵画（含む版画）、工作、デザイン、鑑賞、その他（造形あそび等）の５つの分野に括り、それぞれ年次別にどう変化していくか又は変化しないかを設問した。尚、ここでは後のページにある各項目別のグラフも同時に参照されたい。

絵画（含む版画）は年少（52%）、年中（48%）、年長（44%）と明らかに、年少から年長へと減少する流れがあった。それとは逆に

工作は、年少（30%）、年中（33%）、年長（35%）、デザイン・年少（7%）、年中（10%）、年長（11%）、と、両者とも年少から年長へと増加傾向を示した。

鑑賞については、ほとんど変化は見られず、「その他」は微細ながら、工作やデザインと同じく年少から年長へ増加する流れを認めることができる。

つまり、美術教育上の教材としては、年少において絵画（含む版画）の占める割合が多く、工作、デザインは

Ⅲー５ 巡視の際、指導助言は主にどんなことですか。 (○は３つ)

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. かたちの正確さ	16	24	20	13	11	12	18
イ. 色づかいのこと	26	26	26	20	36	28	26
ウ. 制作集中	23	29	26	47	36	41	31
エ. 課題理解	26	45	35	53	29	45	38
オ. 工 夫	48	37	43	57	39	48	45
カ. 意 欲	61	63	62	57	54	55	60
キ. のびのびと自由に	82	85	84	93	82	88	85
ク. 感動が伝わるか	10	15	12	0	0	0	8
ケ. 模 倣	10	10	10	13	18	16	12
コ. 画一的でないか	6	10	8	10	0	5	7
サ. 用具材料の使い方	40	52	46	47	39	43	45
シ. 制作の妨げ	24	24	24	13	11	12	20
ス. そ の 他	2	0	1	3	7	5	2
無 回 答	2	0	1	0	4	2	1
区別あるもの	13	16	15	17	11	14	14

確かに、ここで１に対する対応が的確であれば、他の内容特に４などは満されてしまうであろう。幼児教育における「絵画制作」や「造形」の場合、まずこのように幼児の制作態度に着目し、さらにそれらを「励ます」ことから始めることが基本であるように思われる。このことは、Ⅰー４授業（保育）に臨むに当たり常日頃基本的に考えていることという設問の回答を参照されたい。

Ⅳー１ 教材、その他についてお答え下さい。数字はおおよそで結構ですが御記入下さい。

Ⅳー１Ａ 美術教育の中味一年間を100として

年次	内訳 項目	幼			保			合 計
		以上	未満	小計	以上	未満	小計	
年少	絵 画 (含 版 画)	52	53	52	50	53	51	52
	工 作	29	30	29	32	29	31	30
	デ ザ イ ン	9	7	8	6	7	6	7
	鑑 賞	5	7	6	7	8	8	7
	そ の 他	4	3	4	5	4	5	4
年中	絵 画 (含 版 画)	49	48	49	45	48	46	48
	工 作	33	33	33	32	34	33	33
	デ ザ イ ン	10	11	11	11	8	10	10
	鑑 賞	5	6	5	7	7	7	6
	そ の 他	3	2	3	6	3	4	3
年長	絵 画 (含 版 画)	46	43	45	40	40	40	44
	工 作	36	36	36	33	36	34	35
	デ ザ イ ン	11	11	11	13	10	12	11
	鑑 賞	6	8	6	8	12	10	7
	そ の 他	1	2	2	6	1	4	2

年少から年長に向かって増加していくということを知る。絵画が直覚的に表現出来ることに對し、工作やデザインは計画性を必要としたり、道具、材料等を駆使することを強いられたいという過程や行過を過なければ表現出来ないという表現方法の違いがでているのであろう。

Ⅳ－１Ｂ・絵画表現の内容を、表の様な７つの項目に区別し、その配分を年次別に問うてみた。すると前記Ⅳ－１Ａで発見出来たごとく、それぞれの表現方法に何らかの流れと方向性を見出すことができる。

年少から年中、年長へと増加傾向を示すものとして、

- ・観察による絵画 < 8—12—16(%) >
- ・構想(想像)による絵画 < 8—11—14(%) >
- ・版による絵画 < 5—6—9(%) >

以上の３項目がある。そして、このグループの流れとは逆の年少から年中高へと減少傾向を示すものに

- ・課題のない絵画 < 25—18—12(%) >
- ・えのぐあそび < 22—21—16(%) >

の二つがある。

ところで、前掲の二つのグループに比して顕著な変化なく、流れや方向性のほとんどみられないものがある。

- ・経験による絵画 < 27—31—31(%) >

であり、そしてこの表現方法は全体に占める割合も最も多くなっている。かくて次の様な課題が考えられる。

- 1・経験による絵画と行事や催物との関係、
- 2・課題のある絵とない絵の問題
- 3・写実的表現を思考する造形とそうでないもの⁽⁸⁾
- 4・発達段階と一斉授業の問題

Ⅳ－１Ｃ・工作の内容を大きく分け、紙工作、粘土工作、廃材工作、その他の四つとして質問した。あまり顕著な変化はみられないのだが強いて言えば、粘土工作は年次を増すごとに減少傾向にある。逆に、廃材工作は年次に比例して増加の方向にある。

Ⅳ－１Ｄ・デザインについてであるが、表にも見えるごとく内容を５つの分野とした。もようづくり、知らせるデザイン、飾るデザイン、使うデザインである。やはりほとんど変化がみられないのだが、各年次共、「もようづくり」と「飾るデザイン」が中心に配分されているのがわかる。

Ⅳ－１Ｃ及び１Ｄから、工作とデザインはそれぞれ、年次を増すごとに僅かながら増加しているのだが、その中味の配分については余り変化をしていないと言える。

Ⅳ－２・描画及び版画を中心とした技法上の経験の有無について質問した。まず、全体の経験率の平均が約50

Ⅳ－１Ｂ 一年間の絵画(描画)の中味を100として

年次	内訳 項目	幼			保			合 計
		以上	未満	小計	以上	未満	小計	
年少	観察による絵	26	34	30	19	29	23	27
	経験による絵	7	10	8	9	9	9	8
	構想による絵	9	5	7	9	12	10	8
	課題のない絵	23	25	24	30	21	26	25
	えのぐあそびなど	25	21	23	21	23	21	22
	版による絵	5	4	5	7	4	5	5
	その他	6	1	3	6	3	5	4
年中	経験による絵	31	35	33	26	27	26	31
	観察による絵	12	13	12	10	12	11	12
	構想による絵	12	9	11	11	13	12	11
	課題のない絵	16	20	18	19	17	18	18
	えのぐあそびなど	21	19	20	19	24	21	21
	版による絵	6	4	5	10	6	9	6
	その他	2	1	1	3	2	3	2
年長	経験による絵	32	35	33	30	26	28	31
	観察による絵	16	15	16	15	16	15	16
	構想による絵	15	10	13	16	14	15	14
	課題のない絵	12	13	12	13	10	12	12
	えのぐあそびなど	14	18	15	13	24	18	16
	版による絵	9	8	8	10	9	9	9
	その他	2	1	2	4	2	3	2

Ⅳ－１Ｃ 一年間の工作の中味を100として

年次	内訳 項目	幼			保			合 計
		以上	未満	小計	以上	未満	小計	
年少	紙 工 作	35	39	37	31	34	32	35
	粘 土 工 作	37	40	38	41	43	42	40
	廃 材 工 作	27	18	22	20	15	18	20
	その他	2	3	2	8	8	8	5
年中	紙 工 作	37	38	37	30	39	34	36
	粘 土 工 作	32	32	32	37	37	37	33
	廃 材 工 作	30	27	28	29	19	24	27
	その他	2	4	3	5	5	5	4
年長	紙 工 作	33	40	35	32	29	31	34
	粘 土 工 作	24	26	24	30	34	32	27
	廃 材 工 作	38	30	36	30	31	31	34
	その他	5	4	5	7	5	6	5

%と大変高いのが目につく。幼児における描画(版画)の方法がバラエティに富んでいることを示唆している。又、経験３年以上の者の経験率平均63%に対し、経験３年未満の者のそれは36%となっている。当然とは思えるものの経験の差が極端に表われている。つづいて経験率

50%を越えるものの数の差は前者16に対し後者6となりこれも大きな差が発見できる。これは、指導（保育）未経験者が同じ内容や方法の繰り返しに陥り易い傾向を予測させることである。

次に、項目20の内、経験率50%以上のものは九つある。多い順に列挙する。

- 1・はり絵（色紙・本の葉等を含め） 90%
- 2・はじきの絵（クレヨンやローと水彩） 82%
- 3・スタンプ（版画の初歩、原初） 76%
- 4・フィンガーペインティング（手や指で） 75%
- 5・色水あそび（えのぐ、草木の実等で） 71%
- 6・きり絵（ハサミで切る） 67%
- 7・染め紙（えのぐ、草木の葉や実等で） 65%
- 8・デカルコマニー（えのぐあわせ） 63%
- 8・吹き絵（えのぐをたらして吹く） 63%

周知のとおり、幼児期の描画の方法は偶然性や意外性の強い、過程の面白さを享受させてくれるものが多い。作品意識よりは行為そのものに意味や目的があるのであり、言及すると“あそび”そのものともいえる。その意味で、指導（保育）者は、長い経験の内から方法を多く知るといよりは、指導（保育）者となった最初から多くの方法を知ることが望ましいであろう。

Ⅳ－3・描画材料について指導（保育）経験のあるものに関する質問である。

全体の経験率の平均は33%となっており、描画材料は可成限られた使用内容であるのが解る。経験率の多いものから順次並べてみる。

- イ) 水彩 94%
- サ) クレヨン 84%
- シ) パス⁽⁹⁾ 68%
- カ) 鉛筆 57%
- ク) 色鉛筆 41%
- ス) 墨 30%

水彩が一位にあるが幼児期においては、これがかたちあるものを描くというより前記（Ⅳ－2）にみるごとく、クレヨンやパスとの併用（はじきの絵）、スタンプのインキとして、色水、染め用等々の使用方法と関連していることが分る。従って必然的に使用頻度が高くなるのであろう。

また、経験3年以上の者の経験率の平均は42%であるのに対し、経験3年未満の者のそれは23%となっており、当然と言えばそれまでであるが差が見られる。しかしこのこともⅣ－2（描画の方法）と同様、指導（保育）経験の差で片付く問題ではないであろう。理想に過ぎるかもしれないが、望ましいかたちとしては、幼児を任される初任の時期での研修が望まれる。

Ⅳ－1 D 一年間のデザインの中味を100として

年次	項目	内訳			保			合 計
		以上	未満	小計	以上	未満	小計	
年少	もようづくり	42	46	44	38	43	40	42
	知らせるデザイン	11	8	10	6	8	7	9
	飾るデザイン	34	28	31	33	24	29	30
	使うデザイン	6	14	10	14	16	15	12
	その他	6	3	5	9	9	9	7
年中	もようづくり	44	51	47	36	28	33	42
	知らせるデザイン	10	4	7	8	12	9	8
	飾るデザイン	31	34	33	33	30	31	32
	使うデザイン	10	9	9	17	22	19	13
	その他	6	2	4	6	10	8	5
年長	もようづくり	40	51	43	34	31	33	40
	知らせるデザイン	8	8	8	9	15	12	9
	飾るデザイン	33	29	32	31	24	28	31
	使うデザイン	15	11	14	22	24	23	17
	その他	4	2	3	5	6	5	4

Ⅳ－2 今まで指導者として指導の経験のあるもの (○はいくつでも可)

項目	内訳			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 手や指による絵	85	56	71	100	64	83	75
イ. マーブリング	48	15	31	63	21	43	35
ウ. デカルコマニー	77	47	62	83	43	64	63
エ. ドリッピング	15	3	9	10	14	12	10
オ. タッススム	2	3	2	3	4	3	3
カ. 色水あそび	89	50	69	90	57	74	71
キ. 吹き絵	76	47	61	83	46	66	63
ク. 糸ひきの絵	50	24	37	57	21	40	38
ケ. ぼかしの絵	44	24	34	40	21	31	33
コ. はじきの絵	92	81	86	90	57	74	82
サ. フロッタージュ	44	18	31	27	7	17	26
シ. スクラッチ	58	29	44	37	14	26	38
ス. 染め紙	81	45	63	97	39	69	65
セ. はり絵	97	84	90	100	79	90	90
ソ. きり紙	82	53	68	73	57	66	67
タ. スタンプあそび	92	56	74	90	68	79	76
チ. 野菜モノタイプ	53	29	41	53	32	43	42
ツ. 転写(ローラー版)	58	16	37	53	18	36	37
テ. 紙版	69	21	45	60	18	40	43
ト. イモ版	52	23	37	50	32	41	38
無回答	0	5	2	0	7	3	3

ちなみに、「その他」が20%と多く見られたが、内容は主にマジック、サインペン及びポスターカラー等であることを加えておく。

Ⅳ－４・絵画指導（造形保育）の際の幼児に対する紙の与え方についての設問である。はじめに、与える紙の方法、次に紙の大きさについて質問した。

Ⅳ－４Ａ・紙を与える、あるいは管理の方法に対する回答を集約し、箇条書きしてみる。

○幼児各個人で自由画帳等を専用している率は83％となっている。保育園（71％）、幼稚園（89％）の比較では幼稚園の方が普及している。

○画用の紙は、自由に使えるよう（44％）よりは、その都度出して与えるよう（66％）になっている方が多い。

○与える紙については、描画方法や材料の違いにより、紙の色や質を変える（82％）、形を変える（52％）、ほとんど変えることなく一定である（2％）となる。

○「その他」（4％）の内には、広告等の紙を常に教室に置き、幼児が好きな時取って描けるよう工夫のみられるものがあつた。

○また、複数回答の多いことから、一方法のみでなく上記方法を重ねて行なっていることも分る。

以上のような結果から考えてみると、まず自由画帳については、個人専用であるためその個人の流れを把握することが出来て良い。反面、幼児が残ることを意識しすぎて描く度緊張してしまうことがある。それに、描く紙が常に一定になる。他の作品との比較等も出来にくくなる等欠点もある。しかしながら、緊張してしまうことに対しては指導上留意すれば問題はなく、むしろ適度の緊張はプラスになる場合もある。また、紙が一定になる、他の作品との比較については、前述の結果のごとく画帳と平行して、画用紙も与えていることが解かり解決する。

さらに、描画方法や材料の違いにより紙の色、質、形等を変えていることは大変重要なことであると思う。このような“変化”は時には幼児の意欲喚起となる場合が多いからである。

Ⅳ－４Ｂ・描画等の際、幼児に与える紙の大小についてであるが、集計を見ると主にハツ切（49％）となっているのが分る。次いでハツ切と四ツ切が半々ぐらいというのが32％ある。

しかし、幼児にとって大きな紙は大人が考えているほど負担となるものではなく、むしろからだ全体から表現するという幼児の特徴を考えると容易いとも言える。その意からすると、もっとハツ切（8％）中心であってよいように思われる。

「その他」の中には、年齢により相違のあることを回答された者もいたことを加えておく。

Ⅳ－５・主に製作（工作）及び造形等で使用される用具や材料についての適不適の問題である。もちろん、個

Ⅳ－３ 描画材料の中で指導の経験のあるもの。 (○はいいくつでも可)

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 油 彩	5	2	3	3	4	3	3
イ. 水 彩	100	90	95	100	82	91	94
ウ. アクリルカラー	24	5	15	27	7	17	15
エ. オナメントカラー	6	2	4	7	0	3	4
オ. カラーズプレー	26	11	19	37	21	29	22
カ. 鉛 筆	66	39	52	77	54	66	57
キ. 画用鉛筆	42	10	26	30	14	22	25
ク. 色 鉛 筆	56	13	35	60	50	55	41
ケ. クーピーペンシル	26	10	18	40	11	26	20
コ. イン ク	21	5	13	23	7	16	14
サ. クレヨン	89	73	81	90	93	91	84
シ. パ ス	84	58	71	73	50	62	68
ス. 墨	47	13	30	50	7	29	30
セ. コ ン テ	42	6	24	7	0	3	18
ソ. ボールペン	18	2	10	37	25	31	16
タ. そ の 他	23	21	22	17	18	17	20
無 回 答	0	3	2	0	4	2	2

Ⅳ－４Ａ 絵画の指導の際、幼児に与える紙について

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 各個人の自由画帳	90	87	89	73	68	71	83
イ. 自由に使えるよう	44	34	39	60	50	55	34
ウ. 授業の際そのつど	69	61	65	70	64	67	66
エ. 教材で紙を変える	92	79	85	80	68	74	82
オ. 紙はほとんど一定	3	2	2	0	0	0	2
カ. 紙の形時々変える	68	39	53	53	43	48	52
キ. そ の 他	5	0	2	7	11	9	4
無 回 答	0	2	1	0	0	0	1

Ⅳ－４Ｂ 幼児個人に与える又は持っている紙の大きさについて

内訳 項目	幼			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. ハツ切である	40	66	53	40	39	40	49
イ. 四ツ切である	8	6	7	7	14	10	8
ウ. 半々ぐらいである	42	19	31	43	25	34	32
エ. そ の 他	10	5	7	7	14	10	8
無 回 答	2	3	2	3	7	5	3

人差、経験、そして環境等の違いにより指導（保育）条件が変わってくる訳で記入が困難かとも思われたが、改めて日頃の経験を基に何歳ぐらいが適当か質問した。

表を見ると、はさみや水彩えのぐの様に比率が集中し頂点を発見出来るものもあるが他はほとんど幅をもった集計表となった。定規は比率の頂点は有るものの4歳から不適まで大きな幅をもっているし、キリに到っては5歳と不適の比率が全く同じである。キリと同型としては、ナイフ、コンパス、ペンチ等が挙げられる。

従って、比率の最高所を最適とし、20%以上のところを適とし、不適と思われるところも20%以上からを各々取り上げて幅をもたせて個別に見て行くこととする。ただし、年歳の低い頂点をもっているところから挙げることとするので設問順にはならない。

大和のり	3歳未満（適）～3歳（最適）
はさみ	3歳（最適）
水彩えのぐ	3歳（最適）
セロファンテープ	3歳（最適）～4歳（適）
ホッチキス	3歳（適）～4歳（最適）
ボンド	3歳（適）～4歳（最適）～5歳（適）
定規類	4歳（適）～5歳（最適）～不適
カナヅチ	4歳（適）～5歳（最適）
カッター	5歳（最適）～不適
ノコギリ	5歳（最適）～不適
キリ	5歳（適）～不適（比率が同じ）
ナイフ	5歳（適）～最適 ※（不適の比率の最も多いもの）
コンパス	5歳（適）～最適
ペンチ	5歳（適）～最適
彫刻刀	5歳（適）～最適

多少乱暴に過ぎると思われるものの上記の規準に準拠して収斂した。一見して、ナイフ、コンパス、ペンチ、彫刻刀等の欄における比率の頂点は“不適”であった。そして周知のとおり、これらに共通するものは使用上難易度及び危険度の高いものである。

しかし、全く逆に5歳ですでに、ナイフは44%、コンパス43%、ペンチ39%、彫刻刀32%と高い比率を占めていることは驚きに値する。幼稚園や保育園で指導（保育）経験を基にした回答である故、可成の幼児がこれらを体験しているということである。“指導”の深さと可能性を垣間見る。

Ⅳ－6・工作材料について指導（保育）経験のあるものに関する設問であるが、Ⅳ－3 描画材料の項と対比することができる。

描画材料においては経験率の平均が33%だったのに対し、工作材料におけるそれは実に68%となっている。そ

Ⅳ－5 下記の用具、材料を幼児に与えるには何歳ぐらいが適当と思われますか。

項目	内訳	3歳未満	3歳	4歳	5歳	不適
ア. ナイフ			1	7	44	46
イ. カッター			1	10	51	36
ウ. はさみ		18	70	8	1	1
エ. ホッチキス		1	22	54	18	2
オ. 定規類		1	7	20	43	26
カ. 水彩えのぐ		16	57	19	5	0
キ. セロファンテープ		10	51	34	2	1
ク. 大和のり		22	68	7	0	0
ケ. ボンド		3	20	45	24	5
コ. 彫刻刀			1	1	32	64
サ. コンパス			1	6	43	48
シ. カナヅチ			2	23	60	13
ス. ノコギリ			1	9	59	29
セ. キリ				5	46	46
ソ. ペンチ					39	54
全無回答	3%					

Ⅳ－6 工作材料の中で指導の経験のあるもの。
(○はいくつでも可)

項目	内訳			保			合 計
	以上	未満	小計	以上	未満	小計	
ア. 画用紙	100	98	99	100	89	95	98
イ. 厚紙	98	63	89	100	75	88	83
ウ. 模造紙	95	60	77	100	75	88	81
エ. 段ボール紙	94	55	74	90	57	74	74
オ. 色紙	98	94	96	93	86	90	94
カ. セロファン紙	85	32	59	80	36	59	59
キ. 紙テープ	87	42	65	97	57	78	69
ク. ひも	89	42	65	90	50	71	67
ケ. 紙粘土	97	63	80	93	46	71	77
コ. 粘土(土)	81	69	75	70	54	61	71
サ. 細木	44	15	29	27	14	21	26
シ. 竹ひご	81	37	59	70	50	60	59
ス. 木片	65	23	44	67	18	43	43
セ. ゴム輪	90	47	69	83	46	66	68
ソ. ストロー	89	63	76	93	50	72	75
タ. 包装紙	92	69	81	93	57	76	79
チ. あき箱	98	89	94	100	71	86	91
ツ. あき缶	81	45	63	77	25	52	59
テ. あきびん	66	29	48	63	4	34	43
ト. 針金	58	21	40	37	18	28	36
無回答	0	2	1	0	7	3	2

して、前者が水彩、クレヨン、パス、鉛筆、墨等に集中していたのに対し、後者は大変バラエティに富んでいることに留意したい。それはここに20項目上げた内容に止まらず、後に触れるが「その他」の記入の多いことから判断できよう。

まずは表から一考すると、紙類の使用が非常に多い。画用紙(98%)、色紙(94%)、厚紙(83%)、模造紙(81%)、包装紙(79%)、段ボール(74%)、セロファン紙(59%)は高い経験率を示している。

次に廃品として、あき箱(91%)、あき缶(59%)がある。

粘土類は、紙粘土(77%)、土粘土(71%)の使用頻度が高い。

つづいて、ストロー(75%)、紙テープ(69%)、ゴム輪(68%)、ひも(67%)、竹ひご(59%)等が経験率5割を越えているものである。

しかし、何といっても「その他」の記入の多かったのがこの項の特徴である。項目には無かった自然物なども多く記入されていた。以下にまとめて記してみる。

○紙類・和紙、つや紙、京紙、クレープ紙、ちり紙、折り紙

○廃品・紙コップ、紙皿、新聞紙、広告紙、あきプラスチック容器、ビンのフタ

○廃材・毛糸、布、綿、オガクズ、ゴムタイヤ、発泡スチロール、ボタン、テグス、タイル

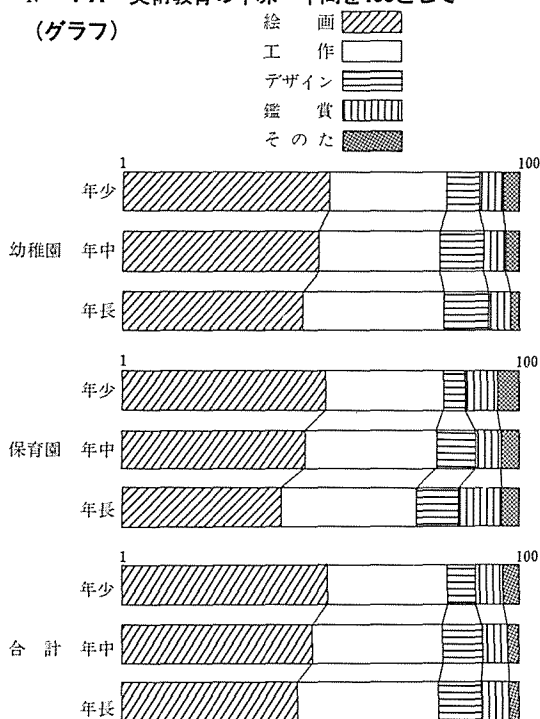
○自然物・木の実、木の葉、草、草の実、石、竹、砂、土、卵のカラ

○日用品・アルミホイル、ガムテープ、サランラップ、割りばし、つまようじ、洗たくばさみ、ビニールテープ、紙袋、ビニール袋、クリップ

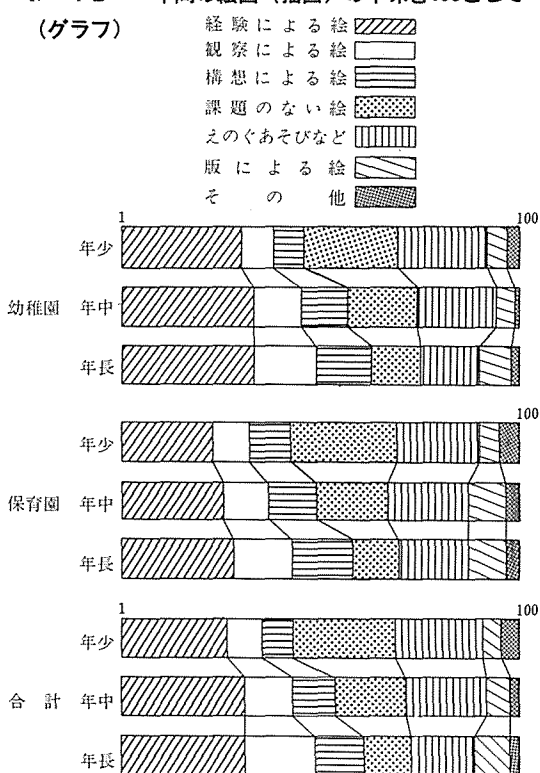
○その他の工作材料・モール、クギ、画びょう、リボン、ベニヤ板、ビーズ、キビガラ、スチレンボード、と列举すると限りがない。手で持てるものなら全てのものが工作の材料となるやに思われる。そしてこの記入量の多さは、この項目が指導者にとって興味のある内容であることを教えてくれる。

ちなみに、指導(保育)経験3年以上の者の項目に挙げた物についての経験率の平均は84%に対し、指導(保育)経験3年未満の者のそれは52%であった。Ⅳ-2、Ⅳ-3の考察と同様、あまり経験の差があってはならない問題と思われる。

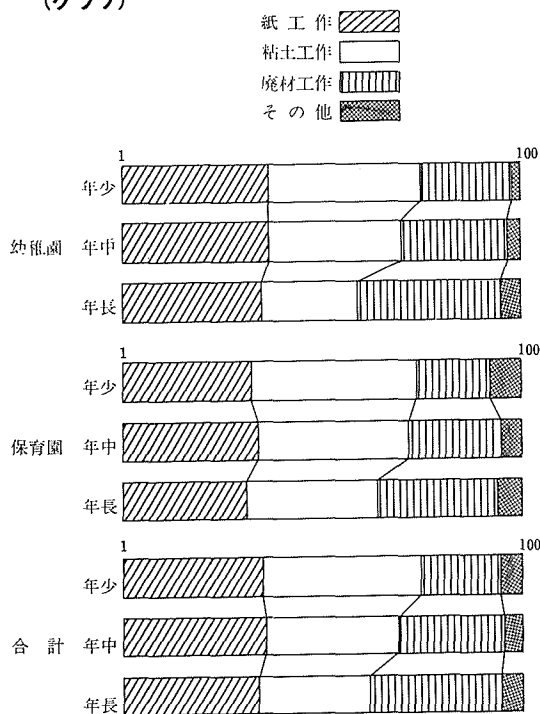
Ⅳ-1 A 美術教育の中味一年間を100として
(グラフ)



Ⅳ-1 B 一年間の絵画(描画)の中味を100として
(グラフ)



Ⅳ－１Ｃ 一年間の工作の中味を100として
(グラフ)



註及び参考資料

- 山本正男著「美の思索」 1973 美術出版社 P.附21
- 川上哲夫・田中陽子「幼児の造形活動」と美術教育 ―その1. 山梨県立女子短期大学紀要19号、1985 P.21
- 川上哲夫「幼児の造形活動」の意味するもの> 山梨県立女子短期大学紀要12号、1979 P.73
- 本文、4・Ⅱ－6 A指導計画の目的達成度の表を参照
- 前掲書「幼児の造形活動」の意味するもの> P.76
- 本文、4・Ⅰ－3 参照
- 1)前掲書「幼児の造形活動」の意味するもの> P.77～78
2)本文4・Ⅱ－3 参照
- 本文「Ⅰ－2 美術教育の際の感動」の設問と関連
- 一般にパスは「クレパス」と称せられているが「クレパス」とは某社の商品名であり、専門的にはパスまたはオイルパステルと呼ぶものである。因にパステルはまた全く別種のものである。

(昭和61年10月7日受理)

Ⅳ－１Ｄ 一年間のデザインの中味を100として
(グラフ)

